

合流する。

最後の二俣を

左に入り、六俣

の滝を越える。

水が溜れる前に

昼食をとり、尾

根めざしてヤブ

をこぐ。尾根に

はかすかな踏跡

が見られた。

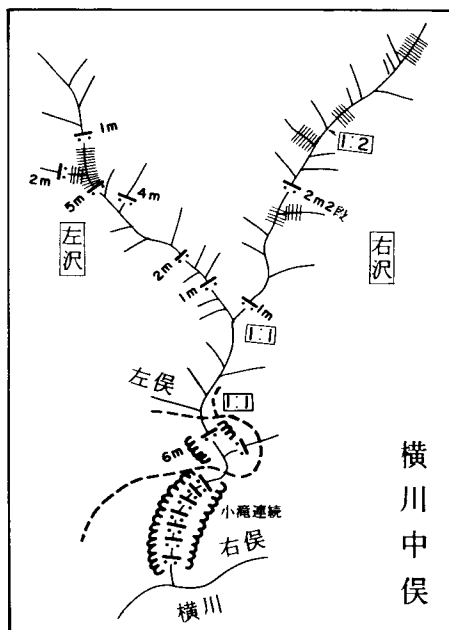
(記・ナ)

「タイム」 林道終点(八〇〇) ↓ 横

川出合(八二〇) ↓ 沢終了(一一

五〇)

二〇) ↓ 四五) ↓ 尾根(一一



## 横川中俣右沢

L<sub>1</sub>

一九八五年一〇月二〇日

一 三号国道から横川ぞいの道路に  
車を進める。しばらく行くと、民家

が二〜三戸ある。今は廃村となつて  
しまった東横川部落の名残である。

そこから先に進むと、林道のゲート  
となる。少し手前に車をデポして林  
道を歩くことにする。

林道を歩くこと三〇分で、横川の  
出合に着く。沢ぞいにこのあたりに  
も釣人の足跡が見られる。

右俣出合を過ぎたあたりからゴル  
ジュとなる。搦き道があると聞いて  
きたのだが、みつからない。帰りに  
わかったことであるが、搦き道は、  
かなり手前から分かれて、右岸のと  
んでもない高い場所を通っていた。

ゴルジュを突破するには、濡れ  
るしかない。季節も季節であり、高  
搦きしたところ、一〇〇以上の大  
高搦きとなった。目的地に着く前  
からきついアルバイトを強いられた  
ものである。夏なら、おもしろいゴ  
ルジュのようである。

ようやく中俣出合である。苦勞し

てきた割には、出合はたいしたこともなく、ガツカリ。気をとり直して先に進む。

最初は平坦地で、沢が右へ左へ大きく蛇行しており、入りこむ支沢も多い。沢幅が狭くなり、勾配がきつくなってきたあたりからナメ床の滝がかかってくる。

源頭部へくると、勾配はゆるくな

## 横川中俣左沢

L<sub>平</sub>

一九八一年七月一九日

尾根上から少し下ると、細い水流が出てきた。ゆっくりと下る。V字に切れ込んでいるが、滝はなく、下降は容易。

右岸からはつきりした支沢の合わさった所で五匹の滝となった。右岸

ってくる。沢の中は泥で、湿地のようである。歩くと足首までズボリ、ズボリ。文殊山のちよつと手前で進行終了とし、昼食を食べて帰路につく。

(記・)

「タイム」 林道ゲート(九〇〇)↓  
横川出合(九・三〇)↓中俣右沢  
出合(一〇・五〇)↓終了(一一・四〇)

のブッシュ帯を下れば容易だが、こ  
こは訓練とばかり、ザイルを取り出して懸垂下降する。横川には滝があるとの事前情報を得ていたから、この先おおいに期待がもてると喜んでいたら、とたんに平凡となった。

左俣出合からは左岸に踏跡があったので、沢から離れてそれをたどる。もう一度沢に下る必要もあるまいと、そのまま踏跡をたどる。

林道の延長工事だろうか。測量ぐいが打たれ、伐採が行われている。

踏跡は右岸に移り、徐々に沢から離れてゆく。ところが、沢の方には滝がかかっている。一〇分程の滝を三つ確認した。入谷前の情報にあった滝はこれだと気づいたが、もう一度沢に下る意欲もなく、後日を期して、そのまま踏跡をたどり、林道に出る。

(記・)

「タイム」 下降開始(一一・四〇)↓  
右沢出合(一二・五五)↓左俣出  
合(二三・一〇)↓林道(一四・〇五)